

光景も見られて、訪中旅行の目的を十分に果たすことができた。私も、旅行社を通じて捜してもらっていた、大学時代の同窓生四人とヘルピン市で会い、熱烈な歓迎を受け、夕食に招かれてお互い片言で歓談交流を果たしたし、畜産学校の所在地だった長発屯の集落でも、二人の同窓生と感激の交流を果たすことができて満足な旅となった。

あの悲劇から五十有余年、七年余りの多感な青少年時代を過ごした満州での生活や出来事は、私の人生における重要な部分を占めていることは、疑う余地のないところである。したがって彼の国の政治の動向や経済の動き、国民生活などには殊のほか関心を持ってきたし、これからもそれはずっと続くことであろう。

我が故郷、満州を思う

群馬県 石川 初吉

一 渡満から終戦まで

私は、昭和二（一九二七）年六月三日生まれである。父は東京浅草で天幕シートの加工販売をしていた。昭和二年、金融大恐慌のあおりを受けて不景気になったときに、知人の連帯保証人になり、知人の借金の肩代わりをしたために商売ができなくなったのか、新天地満州で一攫千金を狙ったのかは定かでないが、家業を母の弟養和田元吉に譲って、単身関東州の大連に渡ってしまった。後年になっても父はそのことについて何の説明もしなかった。

父は大連で食べてゆくためにいろいろな仕事をして、自分に向いたものを探すのに苦労したようである。昭和六年九月に満州事変が起きてから、父の運が開けてきた。満州出兵のため大連に進駐した、仙台の

第二師団が募集した軍属に採用され、収入が安定したので、母と私は父に呼ばれて大連に渡ることになった。はつきりした記憶ではないが、下関から大連へ行く船に乗ったのを覚えている。船室は三等だったと思う。

第二師団の北進に従軍した父は、持ち前の才覚を認められ、師団長付きとなって種々の雑用を上手にこなして、重宝がられていたようである。師団がハルビンに駐屯しているうちに満州国が建国され、師団に帰還命令がでたが、父はハルビンに残留することを希望して、師団長の口添えでハルビン市公署に採用された。父は将来自分で商売することを考えていたので、それに都合がよいように勤務先は物品購入を担当する用度課を選んだ。母と私と大連で生まれた妹と三人で、ハルビンに引っ越すことになったのは、私が小学校一年生の夏休みときであった。

当時の満鉄は、大連から長春の間を運行していて、長春から先、ハルビンまでは東清鉄道の名残りでもソ連が管理していた関係か、長春で私たちが乗った列車に

は、銃を持ったソ連兵が警乗していたのを見てびっくりしたのを覚えている。長春まで迎えにきていた父と一緒にになって、一家四人そろっての初めての旅行になった。車両は片側に通路のあるコンパートメント方式で、木製の長椅子には毛布が敷いてあった。車窓から見た大平原の様子は今でも鮮やかに記憶している。

当時のハルビンは、北満で収穫される農産物や、シベリアやカムチャッカで獲れた毛皮の集産地として活気を呈しており、十数カ国の人が住む国際都市であった。父は、二年余りの市公署勤めをした後に、独立して石川洋行という商号で商売を始めた。最初の仕事は、地方都市の諸官庁への物品納入で、月の大半は出張していた。徐々に商売の地盤ができて、昭和十四年ころから東京で扱っていた天幕シートも販売するなど、だんだん仕事の規模も大きくなってきた。店舗もメインストリートのキタイスカヤ街に移った。満鉄や関東軍の受注にも成功して、まさに順風満帆であった。語学は全く駄目な父であったが、商人としての信義は相手が何国人であろうと、きっちり守った。満州

商人、ロシア商人、朝鮮商人、いずれの国の商人も、一度信用すると更に大きな仕事をさせてくれた。父の満州での商売は成功した。商売に成功したからといって、内地に帰ることなど考えていなかったから、財産を内地に移したりしなかった。また父の成功を聞いて郷里からいろんな寄付要請があつたが、父はそれぞれに応分の寄付をしていた。

私はハルビンにきてから終戦までに、二度内地に帰っている。一回目は、小学校三年生の冬休みに、母方の祖母の墓参りに行ったときである。この旅行には父だけが参加せず、ハルビンに残った。「この冬は寒いから春になってから帰ってくればよい」というので、三月末まで父母の郷里、栃木県安蘇郡常盤村に滞在することになり、私は小学校三年生の三学期を常磐小学校で過ごした。これは私にとって貴重な体験だった。男女一緒の学級には、地主や自作農の子供と小作人の子供がいた。小作人の子供の生活程度はかなり低く、昼食を持たずに来る者もいたし、持ってきてもおかずなど何もなく、麦飯に塩を振りかけただけの粗末

なものであつた。それでも昼食を食べられるだけ良いという。ハルビンの社会では考えられないことであつた。後日、テレビのドラマで「おしん」を見たときも、その記憶が鮮やかによみがえってきた。

昭和十五年、私はハルビン桃山小学校を卒業し、ハルビン中学校に六期生として入学した。中学校には、国防色の制服に巻脚絆といういでたちで通学した。軍隊そっくりである。しかし学校生活は若い力があふれて、それなりに青春を楽しんでいた。背伸びした文学論や恋愛論に花を咲かせたし、また乗馬やグライダーの操縦など、内地の学校ではなかなかできない体験もした。

私の二回目の内地訪問は、昭和十七年十二月の中学二年の冬休みで、やはり父がハルビンに残って母と弟妹とが一緒だった。ミッドウエイ海戦の真相も知らず、戦局の行方を不安に思うことなど無かったが、内地の食糧事情は前よりもひどく、東京の食堂では御飯も雑穀入りであつた。農村でも、若者は召集されて人手不足であつたが、食べ物を作っている強みは何者に

もかえられなかった。都会生活者が食糧を手に入れるために、農村に買い出しを始めたのもこのころだったと思う。ハルビンに戻ると食糧事情はもちろん、何でも内地よりはるかに良かった。キタイスカヤ街のロシア料理店も相変わらずにぎわっていたし、モデルン劇場ではバレエや管弦楽団の演奏会も行われていた。

しかし、昭和十八年中学四年生になると、学生生活にも変化が現れてきた。いわゆる学徒動員という勤勞奉仕である。夏休みを前に吉林省平安高知開拓団に行き、農作業をすることになった。開拓団の人たちは稲作と畑作両方やっていて、一戸あたり三町歩程度の耕作地があった。内地では大百姓である。しかし、その耕作地は入植者が開拓したのではなく、満人農民が開拓した農地であり、家屋も満人が建てたものをそのまま使っているのである。満州開拓の理念とは相反する現実があった。終戦後、開拓団本部から遠く離れたいた部落二十戸あまりが、満人の反撃を恐れて全員毒薬を飲んで自殺したという話を、ハルビンへ引き揚げてきた別の開拓団員から聞いた。

昭和十九年、中学五年生になると十月から翌三月まで、工場と軍隊のどちらかで勤勞奉仕をすることになった。私のクラスは、ソ満国境に近い虎林の二六三四部隊有井隊へ派遣されることになった。

有井隊は、東安にある野戦兵器廠の前線部隊であった。三等客車に乗って、ノミヤシラミに刺されながら牡丹江^{ポクシコウ}を経由して、国境の街虎林に着いた。駅には部隊の兵隊が出迎えに来ていた。兵舎に案内されて驚いた。兵舎というようなものではなく、壕であった。メートル半ほど掘り下げた壕の中央に通路、両側に板張りのお粗末なものであった。一つの兵舎に二十人が入った。あとで分かったことであるが、昭和十六年関東軍特別大演習、「関特演」のときの急造兵舎だったのである。毎日の生活は全く軍隊式で、内務班が編成され、下士官の班長の下に兵長か上等兵の班付がいた。軍隊と違ったのは、ビンタや鉄拳制裁がないことであった。部隊の敷地はかなり広く、小高い山がいくつもあった。小高い山を取り巻くように道路が

あって、道路沿いには、適当な間隔に掘られた横穴に、兵器や弾薬などが保管されていた。平地の倉庫には、渡河用の舟艇などが保管されていた。この舟艇は橋の橋脚にもなるようであった。勤勞奉仕の作業は、これら武器や舟艇の整備や点検であった。また、真夜中に非常呼集がかけられて、部隊の引き込み線の貨車に兵器弾薬の積み込みを行うこともあった。東滿の深夜は零下三〇度にもなるから、若いとはいえつらい仕事である。お互い顔を見合わせながら、凍傷にかからないよう注意し合った鼻の頭や頬など、直接外気に触れているところが白くなってくると、凍傷の始まりである。そこを素手でこすって、血の流れを良くして凍傷を防ぐのである。積み込みが終わった貨車がどこへ行くのかは全く知らされなかったが、兵隊たちの話では沖繩らしいということだった。

昭和二十年三月、ハルビン中学校を卒業して、ハルビン工業大学電氣科に入學した。そのころ、神風特攻隊と木造爆薬艇の突撃にもかかわらず、南方の作戦ははかばかしい戦果を挙げていないなど、戦局の厳しい

ニュースが滿州にも伝わってきた。当時滿州にいた日本人は、日ソ不可侵条約があるし関東軍がいるのだから、ソ連が滿州に攻め込んでくることはないと思っていた。しかし、私は約半年国境の兵器廠に勤務した体験から、備蓄していた兵器がかなり南方に転送されたことを奉仕作業で実感していたので、関東軍の戦力は、一般の人が信じているほど強大ではないと思っていた。

大学に入った年の七月に繰り上げ徴兵検査があり、私は甲種合格であった。理工系の学生には徴兵猶予があったが、それもいつまで猶予されるのか、いざれ召集令状が届く日も近いと予感していた。乗馬訓練や、グライダー操縦訓練は懸命にやった。グライダーは、初級機の段階を終了して三級滑空士となり、二級を目指していたときに、突如ソ連軍が参戦し、国境を突破した機械化部隊と航空機部隊の侵攻は素早いものであった。

八月八日、ハルビンにも照明弾が落とされたが、示威行動であった。大学では直ちに学生隊を組織して、

学寮を中心に防御線を設定することになり、上級生は軍事教練の銃で武装し、下級生は渡された手榴弾と木銃を持って寮に泊まり込んだ。いよいよ最後のときが近いと覚悟を決めた。

八月十五日、終戦の玉音放送を大学事務室で聞いたが、雑音が多く内容がよく分からないところがあつたが、敗戦ということだけは分かつた。日本は負けたのである。一体これからどうなるのだろうか？

過去に敗戦の経験のない日本人にとつて、ましてや日本の植民地のような満州で敗戦を迎えて、今後どうなつてゆくのかは全く想像もできなかった。やがて、悲惨で厳しい現実を迎えることになつた。

米英との戦争が始まつてから統制経済が始まり、ハルビンでも手に入りにくい品物が出てきた。私のところは満州商人たちの配慮で、肉、卵、甘味品、乳製品など必要なだけは確保できて、不自由することはなかつた。

酒が全く駄目な父は甘い物には目がなく、コーヒ―、紅茶、砂糖などは切らすことはなかつた。これ

が体を壊す原因になつた。終戦直前であつたか、召集令状がきた店の若い者を、二キロメートルばかり先の駅まで送れずに、途中から帰ってくるほどに弱つていた。四十過ぎたばかりの男盛りなのである。ソ連が参戦して敗戦を迎え、父が築き上げた財産と商権は、一挙に崩れ去つたのである。

二 終戦から引揚げまで

戦いは終わった。武器は防空壕に埋めて、そしてめいめい帰宅した。私は自宅に戻つたが、寮生活をしてきた者たちは、家族のところへ帰るのが大変だつた。日本に帰り着くまで再会できない者もいた。それぞれが生き抜くための戦いの始まりである。生命財産を守つてくれる軍隊が崩壊してしまつた今、結局は自分で自分を守つて生きて行かなければならなかつた。

ソ連軍がハルビンに入つてきた。囚人部隊といわれた、きわめて程度の悪い兵隊たちであつた。略奪、暴行は当たり前、婦女子のいる家庭では、自衛手段として天井に隠したり、床下に潜ませたりして難を逃れた。そのうち、日本人狩りといわれる日本人男性の拉

致連行が始まり、婦女子だけでなく男も隠れなければならなくなった。

拉致された日本人男性は、遠く牡丹江市まで連れて行かれた。別にこれといった労役を強いることもなかったから、何のための連行かその目的が分からなかった。おそらく、人数を分散して抵抗力をそごうとしたのであろう。これは、後日私が拉致されたときに感じたことである。

悲劇も起きた。中学の同期、榊原君には評判の美人姉妹がいた。ソ連兵の侵入略奪が始まったとき、母と姉妹の悲鳴を聞いて、潜んでいた天井裏から飛び出したお父さんと榊原君は、ソ連兵に射殺された。またヘルビン工大応用化学科の野助教授は新婚早々であったが、前途を悲観して心中してしまった。女性はもちろん、男たちも街を歩くこともできず、生活物資の調達にも事欠く状況になった。

私の家族は父母、妹二人、弟の六人であったが、父が事業をやっているときから親しかった中国人が、家主のアパートに住んでいたので、ソ連兵の略奪にあわ

ずに済んだ。周囲に住んでいた中国人も、我々のことを密告するどころか、何かにつけてかばってくれた。食糧は、父の事業の片腕だった呉最盛氏が届けてくれたし、貴重品も保管してくれたり、引揚げのときまで親身になって世話をしてくれた。

ソ連軍の軍政が始まるとすぐに軍票が発行されたが、まことに粗末な印刷の軍票であった。信用度は低く、当初は受け取りを拒否した商人もいたそうだが、銃を突き付けての強引なやり方には勝てず、徐々に流通するようになった。ソ連は、この軍票で相当膨大な物資を調達しては、貨物列車でソ連領に運び込んだ。機関車だけが、引き返しては次ぎの貨物列車を引っ張って行くというやり方であった。このやり方は客車についても同じで、後日、日本人が引き揚げるときに車両が不足する一因となった。

軍票の流通が順調になると、ソ連軍の兵隊たちの買いあさりも尋常ではなくなった。郷里にないものは何でも欲しがった。特に腕時計、宝飾品、ハンドバッグ、洋服などである。軍政下で治安も安定してきたの

で、利にさとい中国商人は、ソ連兵相手に商売を始めた。露店市場があちこちにでき、日本人も換金のためになけなしの物を売った。女性の和服は土産品としてよく売れた。男物では、ウール地のセルの着物は洋服に仕立て直せるので、高値がついた。

日本人会なども組織され、市中も平穩になってきた九月末から十月初めにかけて、ソ連軍がきわめて巧妙な方法を使って、新たな日本人狩りを始めた。隣組の組長に、使役のために男子の提供を命じてきたのである。私たちの隣組は、父と私と四十代の人の三人だけだから、結局私が行くことになった。この使役作業の三カ月間は、私にとって強烈ですさまじい敗戦体験となるのである。前の日本人狩りで、牡丹江まで行ってきた友人の情報が役に立った。ソ連兵は、身体検査をするといつてはめぼしい物を略奪するというのである。私は対抗手段として、ぼろ財布に少額の軍票を入れて胸のポケットにしまい、旧満州国紙幣は、極寒の冬に備えて携行した防寒外套の襟に縫い込んだ。

夕方、斜紋街の一角に集められた男たちは総勢四十

余人である。年齢は、三十代後半から四十代といったところである。ソ連兵に引率されたところは、約四キロメートル先の旧関東軍司令部で、今はソ連軍の駐屯地になっていた。兵舎の前で全員座るよういわれた。いよいよ身体検査が始まるなど覚悟していると、逐次兵舎内に呼び込まれた。二人、三人、一人と、時間間隔も人数も一定しない。自分の番がきて中に入ると、旧日本軍内務班の部屋で、寝台はなく床だけの部屋であった。身体検査にかこつけた略奪が行われたのは、情報のとおりであった。呼び込む人数のばらつきは、検査しているソ連兵の手が空き次第呼ぶからであった。私は、とっさに将校の前に立った。彼は私のポケットに触り、財布の中身を改めもせず取り上げると、部屋の隅に行けと言った。将校として、こういうやり方に多少後ろめたさを感じていたのであろう。隅に座って辺りを見回して、思わず苦笑した。裸にされたパンツの紐通しの中に隠した金を取られている者、靴を脱がされ靴下や中敷きに隠した金を見つけられている者、全くよくも捜し出すものである。金品探しが

終わるまでに相当の時間がかったが、終わればほったらかしである。尋問もしないし、作業の予定についても説明しない。それどころか、人数確認の点呼もいじ加減である。十四、五人の部屋に四十余人が詰め込まれたのだから、膝を抱えて座ってもぎゅうぎゅう詰めで、便所に立つと帰る場所が無くなってしまいう始末であった。それでも眠気には勝てず、もたれあつて眠る。気が付くと、人の股ぐらに頭を突っ込んでいたことなどよくあつた。

一夜が明けた。顔を洗うのも飲み水もトイレの水道を使ったが、食事の内容はひどかった。食事ではなく餌である。飼料用の粟を湯にくぐらせた程度のものである。石油缶に入れて持ってくる。手のひらに配るのである。石油のにおいがするうえに、粟は皮付きときては食べられるものではない。三日か四日か期間にはつきりしないが、この兵舎を出るまでは水だけで過ごした。

この間に、入れ替わり立ち替わり日本語の堪能な人がきて、「この中に元憲兵、脱走兵がいるだろう。該

当者は申し出よ。申し出がなければ明朝全員銃殺する」と脅かす。タイミングよく、外では銃声がする。おどしであるのは分かり切っているが、全員が騒然としてきた。「だれだ、だれだ」などとわめく者もいる。使役だといって集められた者の中に、そんな前歴を持つ者がいるはずのないことは、少し冷静に考えればわかることなのだが、恐怖が理性を失わせてしまう。「そんな人がいるわけがない」といったら、「貴様そんなことを言つて責任をとれるか」と怒鳴られた。全く情けない。ソ連軍も中国人も、「日本人というのは、神風特攻隊に象徴されるような精神の持ち主」と思っている。だから、危険な考えの日本人を選別しようと、脅しをかけて反応を見ているのであろう。三日目ぐらいだったか、中国人がきて「お前たちはこれからシベリアに行つて働き、ウラジオストックから日本に帰国する」という。「それは困る。家族が心配だ」などと言つて苦情を申し立てたが、どうあがいてもこちらの言い分が通らないのは分かっているが、不安がつつてくる。

その翌日に移動するという。どこへ連れて行かれるのか全く分からず、不安なままで出発した。初冬のよく晴れた日であった。やがて行き着いたところは、開拓団現地訓練所あとの新香坊避難民収容所であった。国境近くの開拓民や、関東軍の軍属とその家族、一般在留邦人などが収容されていた。わたしはここで、一般在留邦人などの悲惨な現実を見た。

当時関東軍では、将校は営外居住を認められていて、家族と一緒に街で暮らしていた。関東軍は、ソ連軍の侵攻が始まるとすぐに特別軍用列車を仕立て、それら家族や関係者に食糧衣類などを十分に持たせて、安全圏に避難させた。素早く避難した軍関係者と、残された一般在留邦人たちとの運命は大きく違った。残された一般在留邦人たちは悲惨だった。列車を手配できるわけもなく、せいぜい老人子供を馬車に乗せるくらいが関の山であった。たいていの人は歩くしかなかった。途中ででけなしの食糧品を略奪されて食べるにもこと欠き、栄養失調で倒れる者が多かった。もちろん医療設備などないので、病人の手当などどうしよ

うもなかった。開拓義勇隊にいた十五、六歳くらいの若者は、栄養失調で骨と皮ばかりにやせ細り、「お母さん、お母さん」と、つぶやきながら息絶えた。その日の死亡者は、夕方本部前に集めて埋葬された。「私が入所していた三カ月の間だけでも、七十五人の遺体を埋めた」と、本部の関係者から聞いた。母子ともに倒れる前に、子供を中国人に預けたという話は現実にあった。親子のつらい悲しい離別である。

一方、私は思いがけない人に出会った。学徒動員で派遣された、虎林の二六三四部隊有井隊の技術将校小川中尉である。小川中尉は、ソ連軍が侵攻してきたとき、連絡のために東安の本隊にいたため虎林には戻れず、東安で武装解除されたという。虎林にいた有井隊は、ソ連の機械化部隊の攻撃を受け全滅、隊長の有井中佐は自決、私たちが世話になった班長、班付き兵長も戦死したという。もし小川中尉が虎林に戻っていたら、ソ連の参戦が三月であったら、小川中尉も私たちも戦死していたわけである。

昭和二十一年四月はじめに、中国国民政府軍が進駐

し、市内の治安も回復してきた。私も自宅に戻った。全く戦闘能力のない日本人男性を、何のために使役名目で集めて拘束したのであろうか。今でも理解に苦しむのである。一説には、日本人会の親ソ連派がソ連に迎合して、隣組の組織を利用するように入れ知恵したのではないかなどといわれたが、真相は分からない。

平成十二(二〇〇〇)年十二月二十日付けの朝日新聞朝刊に、「外交記録公開」の記事があった。当時の外務省の認識と、現地邦人が体験した現実との間には、大きなギャップがあることがよく分かる。新聞には、「終戦前日八月十四日外務省が各地に『居留民はできうる限り定着の方針』と緊急電を発した」と書いてある。いかに敗戦経験のない国家の政府とはいえ、軍事力を背景に、中国の農民たちを立ち退かせたあとに入植した開拓団もあって、中国農民が反感を持っていることが分からないのであろうか。さらに、八月三十一日戦後処理会議が決定した方針として、「できうる限り現地において共存親和の実を挙げるべく、忍苦

努力するをもって第一義たらしむ」(戦争終結に伴う在外邦人に関する前後措置)と述べたとは、なんと実情を知らないことであろう。

日本は、大東亜共栄圏とか満州五族協和とか唱えていたが、被占領国民が日本の言い分を理解し、歓迎していたと思っていたのであろうか。関東軍の任務には「在満邦人の生命財産の保護」はなかったのか！ 新香坊収容所で軍関係者が早々と避難し、開拓団員が出会った悲惨な現実を比べると、軍は在満邦人の生命財産を保護する意志など全くなかったと断定できる。ソ連軍が不可侵条約を無視して侵攻し、乱暴ろうぜきを働いたとしても、今少し関東軍がとるべき方策があったのではないか。今更いっても仕方がないことであるが、敗戦時の軍の無責任ぶりが全くもって情けない。

平成十三年二月三日、ハルビン中学六期生の関東地区新年会が、東京で行われた。同期の一人、佐藤和夫君は、唯一新香坊収容所の体験を共にした友人である。その彼が差し出した印刷物を見て、私は強い衝撃を受けた。

日本人公碑建立世話人

礎会 ハルビンの会

新香坊収容所縁者有志

発起人 ……

地域開発のために新香坊収容所跡地を整地中、白骨が発見された。それも、四千体を越すというその慰霊墓碑建立のための募金趣意書であった。戦後半世紀を経て、やっと鎮魂の目的が果たされるのである。心から合掌して冥福を祈るのみである。これでやっと、私の新香坊の戦後が終わったのである。

五月、ソ連軍が撤退して、中国国民党と共産党の内戦で、ハルビンには通称八路軍が入ってきた。人民裁判などが行われて一部には混乱もあったが一般の治安はよくなった。日本人の引揚げも始まった。病人や老人を主にした列車が運行されることになったので、体調を崩していた父は、この列車を利用することになり、私たちも一緒に帰国することになった。九月中旬にハルビンを発った。列車は無蓋貨車であった。各人

の携行品は制限されていたが、それでも食糧衣服などでいっぱいになり、人々は荷物の上に座るといふ混み方であった。国共内戦の最中であつたが、アメリカの仲介で一時休戦して、日本人の引揚げを行ったという。第二松花江ショウカクワウの鉄橋は内戦で爆破されており、徒歩と船で渡った。父は担架で運ばれた。

長春に着いた。時計もカレンダーも手帳もないので、引揚げが始まってからは時間の感覚が全くなくなつてしまい、どのくらい時間がかかったか全く記憶がない。列車が走っている間の用便を、どう始末したかも全く覚えていない。ただ覚えているのは、列車が野原で停車したときなど、皆一斉に下車して男女並んで排便したこと、駅で出会つた別の引揚げ貨車が囲いのない床板だけだったことである。乗っている人が張つたのであろう、転落しないように四周にロープを張り、床に置いた荷物にしがみつくようにして乗つていた無残な光景が、鮮やかに記憶に残っている。

奉天（瀋陽）で列車を降り、略奪で荒廃した家屋に収容され、何日か過ごした。葫蘆島で引揚げ船に乗るこ

とに決まったので、列車を再編成するための待機期間であった。奉天市内に出掛けてみたが、思ったとおり日本人の姿はなく、物価はハルビンよりも二割ほど高いと思つた。

葫蘆島の収容所に着いてみると、かなり多くの人々が船を待っていた。久しぶりに海の香りを胸いっぱい吸い込んで、遙か彼方の日本を懐かしく思つた。日本は今どんな状況なのか知る由もないが、日本しか帰るところはないのである。やっと私たちの乗船の順番が回ってきた。

船は米軍の貨物船でリバティ型という船で、船員は日本人ばかりであった。船員の話では、この船はリベットを一切使用せず電気溶接で鉄板をつなぎ合わせて造るので、五日から一週間で一隻ででき上がるということであった。間に合わせの船らしく、速度が遅いぐらいに揺れも激しかったから、船倉で寝ていても酔いがかつてきた。暇を見て、船員が慰安の演芸会を開いてくれたが、楽しめるような心境ではなかった。そして悲しいことに、博多港に入港するまでに亡くなった人

の葬儀が二度あった。航海中のことで水葬であった。故国を目の前にして力つきた人たちは、どんなに無念であつたらうか。

博多湾に入って緑豊かな山々を見て、「ああ、日本だ、やっと日本に帰つた」そして「国破れて山河あり」という詩が浮かんだ。博多の大濠公園収容所で、検疫のために二日間滞在し、列車で郷里に向かうことになった。超満員であつたが、客車であるのは有り難かつた。途中広島島の惨状も見た。東京まで何時間かかつたか、もうそろそろ時間的な感覚を取り戻さなければと思つた。郷里の栃木県安蘇郡常盤村は、浅草から東武電鉄を利用するのであるが、松屋百貨店の二階にある東武浅草駅から見た浅草、上野などの被害状況は想像をはるかに越え、一面の焼け野原であつた。私たちも、帰郷してから一家六人の生活をどうするか、すぐに結論の出ることではなかった。落ち着いてから考えることにするしかなかつた。

三 引き揚げてから現在まで

父母のふるさと、栃木県安蘇郡常盤村（葛生町）に

落ち着き、父の実家でしばらく厄介になった。伯父は、戦時中翼賛壮年団長を務めたことで公職追放になり、祖父の代からの特定郵便局も人手に渡し、さらに農地解放で自作地をわずかに残すだけという状態なので、長く世話になるわけにはゆかなかつた。とにかく借家を見つけて、伯父の家を出なければと考えた。妹は、ハルビンで扶桑高女の一年生であったので、県立佐野女子高等学校へ転入できた。小さい弟妹は、地元の小学校へ行った。私は、山に入って枯れ木を取るのが日課だった。農地解放で自作農になった農民は、配給の食糧だけではとても足りない都市生活者との鬮取引で、豊かになっていった。私が、小学校三年生のときに見た小作人の姿は、どこにも見られなくなった。時代は大きく変わったのである。

当時、農作物はすべて統制品として流通が制限されていた。戦時中、麻は軍用品として重用されていたが、戦後は下駄や草履の鼻緒の芯縄原料として珍重されていた。麻は、原料そのものは統制品であったが、製品になった芯縄は自由販売という矛盾した状況で

あった。栃木市は芯縄の生産販売の中心地であったが、芯縄業者は配給の麻だけでは需要に応じられないので、不足する分は当然鬮取引でおぎなつた。

父は、自分に適した商売を探していたが、私も手伝って麻のブローカーを始めることになった。商売には資金が必要で、麻のできる秋になると親せきから借りる金額では全く足りず、買い付けに来るブローカーから、市価より一割五分から二割高の値段で契約し、三カ月後と六カ月後の二回に分けて支払うことにした。手形決済と同じやり方である。折からのインフレで資金不足は解消して一息つき、ついに栃木市に進出して芯縄業を始めることになった。

この業界も競争は激しい。新しく参入するものは、古くからの業者に邪魔される。新規にこの業界に入った私は、古くからの同業者が仕組んだ罠に引っかけたり、経済事犯として取り調べを受けた。罠に掛けられたとはいえ、法に触れている以上いい逃れはできず、裁判にかけられて罰金刑を受けた。同業者皆が同じ方法で商売をやっているのに、私の所だけが摘発される

など今では考えられないことである。父もこの商売が嫌になって相場を始め、一時うまくいくように見えたが、結局は失敗した。

やがて、警察制度の改正で市警は廃止され、都道府県警察に一元化されてすっきりしたが、私たちの一家はバラバラになった。父はハルビン時代の友人の勧めで、群馬県桐生市の織物工場の管理職に就いた。私は、栃木で母と共に細々と芯縄業を続けていたが、昭和二十七年ごろになるとだんだんと行き詰まってきた。小学校から高等学校まで、履き物は草履から運動靴に代わって、芯縄の需要が少なくなってきたからである。加えて、私の得意先も倒産してしまっただうにもならず、一切を処分して父のいる桐生に移った。昭和二十九年夏であった。

当時の桐生市は戦後の織物、いわゆる「ガチャマン」ブームが去り、代わって輸出入絹織物が盛んになったが、朝鮮戦争後の経済不況で企業の倒産が続出し、老舗が消えていった。父が管理していた織物工場が、税金を滞納したため競売され、またしても商売を

探すことになった。しかし、根っからの商人としての嗅覚は見事なものであった。今までの織物ではなく、合成繊維ナイロンの織物に着目した。アメリカの援助物資に混じっていた中古のナイロン靴下をほぐして、その糸でスカーフを作るといふものである。スカーフ自体は簡単な平織りであり、鉄釜で染色するだけである。縫製は以前からのミシンを使った。つまり、桐生に従来からあつた分業制の各工場を利用して、織物の素人でも製品化することができたのである。

当初、内地向けの季節商品として作っていたが、同じものを作る業者が増えて、生産量もかなり増えてきた。輸向けの話がきたのはそのころである。輸出となると、生産量は年間を通じて一定量供給できなければ成り立たない。古靴下をほぐした程度の原料ではとても間に合わない。幸い東レがナイロンクリンプ糸の生産を始め、桐生の需要にに応じてくれることになった。これは、太い百五十デニールの糸が十五デニール十本で作られているので、この糸を熱処理して十本に分解すると、十五デニールの糸ができるというわけで

ある。これで大量生産が可能となり、最高年間百万ダースが米国、欧州各地に輸出されることになった。しかし業者間の過当競争が激しく、値崩れを起こした。業界は組合を作って値崩れの防止を図ったが、ファッションの多様化の中で、安いだけの商品というイメージが国内外に広まり、ミシン縫製や染色などは内職に依存していたことも、高度経済成長期の世風に合わず、だんだん需要が少なくなっていた。現在では、かつての一割にも満たない数量が細々と生産され、わずかな内需と輸出に面影を残している。

私は父とは別に会社を興して、スカーフと同じナイロン糸と人絹を交織し、オパール加工した織物を約三十数年続けたが、五十五歳のときに会社の運営が行き詰まった。共同で新規事業を始めようと申し入れてくれた人もいたが、私は止める決断をした。そして金融会社にも、関係していた会社にも迷惑を掛けることなく会社を閉じることができた。

そして、これを機にその年の二月、念のために人間ドックに入って検査をしたところ、胃ガンが発見さ

れた。幸い早期であって、四月五日、胃の四分の三を切除する手術が成功し、四月二十六日退院できた。もし新規事業にかかわっていたら、ドックに入っていたかどうか。自分が選んだ道に、運命的なものを感じる。現在まで個人商店として細々とやってきたが、七十二歳で仕事を止めた。現在、私の健康状態はまず良好である。月に三回ゴルフに興じ、時折マージャン卓を囲む。

思えば敗戦後、満州でどんな事態にあっても不思議ではないのに、家族全員が無事帰国でき、父は七十七歳、母は九十二歳で亡くなるまで、それぞれ精いっぱい生きざまだったと思う。私も、決して経済的には恵まれたとはいえない零細企業の運営を二度にわたって経験したが、二度とも時代の変革についていけずに成功しなかった。戦後の五十数年は、激動の中を駆け抜けてきたような気がしている。大企業に勤めた人たちは全く異なった経験である。良くも悪くもこれが私の人生である。私には子供がいない。二十一世紀の日本はどうなっていくのか。地球上のどこで起

こることも、すぐに世界中に影響を及ぼす昨今であるが、平和が世界中から消えることのないように、心から祈念して筆を置く。

アカシアそして百日紅^{サルスベリ}

群馬県 初谷 三衣子

一 大連生まれ

私は兄二人、姉二人の末っ子として昭和十(一九三五)年大連で生まれ、終戦まで大連で育ち、戦後の一年を吉林で過ごした。大連時代は恵まれた環境で過ごしたが、あの玉音放送が終わって敗戦が決まった瞬間から、逆の厳しい環境に置かれることになった。その上、私は引揚者として多くの困難な事態を経験した。そんな経験を経て、小事にこだわらず、多少のことではくじけない性格になった。日本に帰ってから、満州のことや引揚げの話になると「やっぱり大陸育ちなものね……」と言われることが多い。良くも悪くも自分

流に過ごして六十余年、自分なりに納得している性格である。

戦後五十五年を経て、当時とあまりにも違ってきた最近の社会情勢を見聞きして、戦争の悲惨さや、戦後の苦難から立ち直るまでのいきさつなどを後世に伝えることができるのは、それを体験した私たちしかないのだから、正しく伝える責任があることを痛感している。今回、機会があって当時のことを書きつづることができるので、過去の出来事を振り返るだけではなく、若い方々に正しく理解していただけるように念じながら筆を執っている。

二 満州へ、満鉄へ

昭和八年、父は広大な満州大陸に魅力を感じたのであろう、満州で思いきり仕事をしたかったと東京の国鉄を退職し、母と幼い子供たちを連れて満州に渡った。父は、自分が決意して選んだ道であったから張り切っていたが、母は未知の世界である満州での生活に不安を覚えたに違いない。しかし、いざ満州での生活を始めてみると、東京の国鉄にいたときに比べて随分恵まれ